

三河アララギ

平成二十六年

六月号

第六十一卷 第六号



ニューヨーク日記(92) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

February 11, 2014 : Gnocchi with Truffles

Blue Shoe Diaries



天気が良い! 屋上にハーブと野菜畑があるレストランでとても新鮮な食材が自慢なレストラン、Rosemary'sで日当たりが良い所でランチ! 今日のスペシャルのニョッキのキノコとトリュフ和えをオーダー。味のバランスがとても上品。このままワイン飲んで一日過ごしたくなっちゃうよ。

The weather is gorgeous today! And that calls for a nice lunch at Rosemary's! They have a rooftop farm where they get many of their produce and it's located in a nice corner of Greenwich Village where you get so much sunshine in the restaurant. Once I heard that today's special was gnocchi with truffles, it was very simple. I just had to have it. And it was yummers! So delicate, so tasty, I may dream about this for a while...

目次

第六十一卷第六号(通卷七二六号)

| | | | |
|--------------|---------------|--------------------|--------------|
| 表紙 蘭 | 今泉 由利 (1) | 鎌倉一見の記を辿りて | 夏目 勝弘 (29) |
| ニューヨーク日記(92) | Blue Shoe (2) | 祝日 | 阿部 淑子 (30) |
| 感銘歌 御津磯夫第十歌集 | (4) | 風祭り | 白井 信昭 (30) |
| 歌集「スモン」 | 大須賀寿恵 (5) | 「LP盤」 | 秋山 逸穂 (31) |
| 甘雨 | 岡本八千代 (6) | 『俳句』 | 植村 公女 (31) |
| 螺髪 | 今泉 由利 (7) | 『ことよせ』 | いーはとぶ (32) |
| 心重ぬる | 弓谷 久子 (8) | 『かさね』の一句 五月号 | |
| 山里 | 青木 玉枝 (9) | 私の一首 | 清澤 範子 (36) |
| 草々の | 内藤 志げ (10) | | 小柳千美子 (36) |
| 春の山里 | 林 伊佐子 (11) | | 佐藤 喜仙 (37) |
| じゃんけん | 安藤 和代 (12) | | 近藤 映子 (37) |
| 花 | 伊藤 忠男 (13) | | 大橋 望彦 (38) |
| 春の雪 | 遠藤 脩子 (14) | ある自然科学者の手記(25) | 今泉 雅勝 (40) |
| 天と地海を | 鈴木 孝雄 (15) | 絹の話(42) | 今泉 一石 (42) |
| 武者人形 | 足立 晴代 (16) | 物理学者と詩歌の世界(52) | 今泉 一石 (42) |
| 穀雨 | 胃甲 節子 (17) | 短歌に詠まれた茂吉 | 鮫島 満 (44) |
| 内緒 | 富岡 和子 (18) | 楽しい時間(18) | 山本紀久雄 (46) |
| 花道 | 森岡 陽子 (19) | 鎌倉一見の記を辿りて | 夏目 勝弘 (48) |
| 三井寺 | 小柳千美子 (20) | 「氷魚」のことから(161) | 岡本八千代 (49) |
| 歌劇 | 伊与田広子 (22) | 『歴代天皇御製歌』(二十五) | 貫名海屋資料館 (50) |
| ばいも百合 | 半田うめ子 (23) | ことのはスケッチ(426) | 今泉 由利 (51) |
| 午の弥生月 | 近藤 映子 (24) | 編集室だより(二〇一四年四月) | 平松 温子 (56) |
| 念願 | 杉浦恵美子 (25) | お知らせ・編集後記・三河アララギ規定 | |
| 誕生仏 | 平松 裕子 (26) | | |
| 朝明け | 小野可南子 (27) | | |
| 竹林 | 山口千恵子 (28) | | |

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

暑き日の光^き剪りて篁にかくれし朱の鳥は幻

P 1 1 2

今年竹となるまへにして撓まねばなびく篁ぬき出でて立つ

P 1 1 4

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

花すぎし八ツ手の広葉に打つ雨を聞きつつ眠りに入りたるらしき

疼ききし足さすりつつ事務室に辞めむおもひのまたきざしきぬ

ビール麦のくれなるの芒光りつつスモンの足を引きずりてゆく

甘雨

蒲郡 岡本八千代

甘雨とか穀雨とかと思ひつつ今宵ふり来し雨の音聴く

わが小さき常の方丈にひとりこもる甘雨の雨の音も静けし

ひとりの時思ふことみな自由にて淡々としてこもごもとして

いつまでもひとり起きゐて本を読むわがこの時のあはれ樂しも

今宵読む「おろか者たち」のおもしろさおろかこそよけれとも感じつつ

豆腐買ひに通るこの道の水たまりより甘雨の水のさざ波ゆれをり

ほつほつに空木の花の蕾白し去年と同じき処にゆれつつ

紙の上に白きすずしろの花びらが零れてをりけり寂しからずや

描かむと机におきし紙の上白じろ萎なえたる花卉びらすずしろ

東ひんがしの空より光さしてくるなにはなしに初夏はつのひかり

螺 髪

東京 今泉 由利

自らの意志のままに意志ありき今日は右に少し傾く

ヘッドホンにとぎれとぎれの子犬のワルツ、私の脳を検査してゐる

工事中のごとき噪音刻みつつ私の脳の画像成るらし

全身のポーツと熱くなりしとき造影剤の巡りゐるらし

のぼりこし月の光のほのぼのと私の部屋に私の影

宵やみの部屋に入りこし月明かり物皆月の影をともなふ

キラキラと時に光を放ちつつ群ゐる鯛の一匹一匹

獣医師に応診されると魚達水族館の水槽の中

水槽に春の嵐の届かざり巨大鮪の超速ひたすら

まっ白の手袋をして仏頭の螺髪彫りをり小さく小さく

心重ぬる

豊川 弓 谷 久 子

散る桜残る桜も散る桜口ずさみつつ木下に佇ぶむ

一しきり風が花びら舞はしたり散り逝く花に心重ぬる

広々と更地となりぬる隣の空地姫踊子草の花は小さし

小豆色の紬の羽織解きをり春のコートにリフォームせむ

忘れたき事は忘れむと君の歌羨しと読みぬ眠れぬ夜に

望月の余りに明るし物蔭の余りに暗し卯月真夜中

咲き残る花の一枝ただきぬ業平椿と名をもつ椿

手作りの紬のコートを着て行かむ今年も祭りに招き呉れたり

小雨の中山車は行くらしお囃子の太鼓の音の遠ざかり行く

言ふまじき言葉は胸に端居かな座右の銘と心に刻む

山里

新城 青木玉枝

夕茜彼方に沈む春の宵わが足もとに桜花はなの一ひら

変りゆく四季の流れを目に耳に山里なれば心ゆく迄

満開の桜の花も散りゆきてさつき若葉の緑あざやか

桜花はなの季節みじ短かき春の山里は青葉若葉に包まれており

山里に早寝早起始まりておそ寝おそ起の辛さ忘るる

伊丹での手厚い嫁との明け暮れを悔いて眠れぬ夜々つづく

九十年長き人生の明け暮れは色いろ学び悲喜こもごと

この歳になりてもおしやれは止められず山里に不向きなブラウスを手に

独居は終日誰にもはばかり出したり入れたり春の逝く部屋

干し竿をきれいに拭きて洗濯物春陽をうけて一枚一まい

草々の

豊川 内藤 志げ

春菊を刈りし跡に平ぶもの微動だにせず大きがま蛙

畑土の色に平ぶる物体は眼つぶりし大きがま蛙

草々の中より髭をたらししむ浦島草を眺めて帰る

大きめに掘る植ゑ穴はさらさらに二度も三度も水を注ぎぬ

庭中の牡丹は揃ひて十花ほど一つの傘に収めておきぬ

やきそばとお好焼とを分け合ひて三河の奥の花冷えの店

朝の窓カーテン開き空見上ぐ雲の速きに霜は下りまい

露の根といちごの根とを選び分けて長き根のある野苺を引く

野苺の細かき棘とげ手袋に払ひ払ひて露の草取り

高速道の側道に沿ひ野ぶどうを草を分けつつ探して歩む

春の山里

岡崎 林 伊 佐 子

鶯の声に目覚めし若き日よ里に帰ればまなかに顯つ

鶯の初音を真似てわが夫は耳癢いわれにくり返し告ぐ

鶯の澄み徹る声を幻聴に今年最後の椎茸をとる

ぢぢばばと呼ばれし小さき草の蘭櫛木のまわりに咲きて匂へり

椎茸の乾燥小屋に通ふとき闇夜の山に羚羊の鳴く

夜を更かしストーブの火を守り仰ぐ空北斗七星ひかり輝く

椎茸を乾かす夜ふけ襲ひくる眠りとたたかひ一夜明けたり

炬燵置き本を読み継ぐ夜の静寂物音きこえぬことに安らぐ

遠山に昇る日出ながめ立つ庭には遅霜降りゐて寒き

朝の陽にミツバツツジも水仙も花明かりするふる里の庭

じゃんけん

豊川 安藤和代

歌会に行く道坂道向い風自転車グイグイ楽しみが待つ

戯れに庭に蒔きたるスナック豌豆吾の背を越し白き花見ゆ

じゃんけんを覚えし二才のじゃんけんはグーばかりなり笑いの中に

休日は孫子集いて十一人その十一の喜びの中

足悪き夫との散歩つなぐ手の久びさなれば遠まわりする

飛び立てる羽の白さや鷺一羽さがりし足の黄色が淋し

見当たらぬ携帯電話に電話すればベッドの中から吾を呼びをり

搾乳機つけられしまま餌を食む重たげなるや乳房うすもも

穏やかな心に強き芯を秘め生き来し人よ白木蓮咲く

用水の水量ややに増えし今朝段越え落つる音の響けり

花

大阪 伊藤忠男

花吹雪舞ひ舞ふ小金井コップ酒樂しひと時声弾むなり

「桜咲く」昔待ちたるその言葉今は友との会える知らせに

花冷えに背中丸めて川沿いを歩くその道明日は若葉に

友の背に昔の自分確かめる年に一度の今花盛り

春霞覆い隠すは真実まことなりリケン隠れて幻の中

雨上がり朝日に光る牡丹花見つめその場を離れがたしや

花柄の着物に若さ託すとしてしわとたるみは誰も隠せず

ほんの一瞬色ときとりどりに輝くも長く続くは緑の葉なり

花に酔い景気に浮かれ春過ぎる暮らし良くなることなきなのに

人ならば心の花は散らすまじ明日を夢見て今日は悔いなし

春の雪

蒲郡 遠藤脩子

早咲きの桜かと紛ふひらひらと風に吹かれて降る春の雪

垣を越え枝垂るる桜の道に来て太田垣蓮月仮寓跡の碑

紅紫色のあの木の大株の花の名はシヨウジヨウバカマと追ひ来て知らざる

竹編みの豊丸垣ほうがんがきの傍らに大きひと株シヨウジヨウバカマ咲く

楓若葉緑に染まる宝巖院苔庭にはな一重山吹

わが庭のベニバナハナミズキ根元掘られ掘られたる側のみ数多花つく

放射能から逃れて蒲郡に住む友よりお茶しませんかと絵ハガキ届く

夫を送る大仕事をなし終へたと見知らぬお嬢に話しかけらる

疲れ滲むお嬢にお元気でねと声かけて日曜の朝の墓参りより帰り来

もしあの時ハグしてあげたら顔くつほれそうな精いっぱいのお嬢の面ざし

天と地海を

沼津 鈴木孝雄

伊豆山の界熱海の湯に浸かり天と地海を包み見るかな

シーラカンスの冷凍標本展示さる誰か抑えん人の釣り欲

この春は桃と桜が共演し碁盤に向かう落ち着き奪う

狩野川を漕ぎ上るダブルスカル息合うオールはまるでアメンボ

種芋の土を割って盛り上がるマグマより強しジャガイモの芽

二巡しもう無いだろうと思いいしもまた見つかぬエンドウのサヤ

身丈より大きな虫を引張りて坂で転げど蟻は放さず

園芸店で棘なしタラノキ苗木見る常識変える遺伝子操作

孫ら来ててんでこ舞いの騒がしさ帰った後は気抜きのビール

地のはずが相手の手筋で死に石に読みの甘さで三目足らず

武者人形

東京 足立晴代

春の雨花吹雪となりてひとしおに美しくもあり風情もありて

大和の国の桜花咲きし早や散るいさぎよきかな

春待ちし桜の花も咲き競いきそ風に流るる花ひらくくと

緑風きそに花々競い咲き匂う春の訪れ今こゝに

水清く川の波間に花びらの白々浮きて花筏

花雲り緑になりて枝々も春の日ざしに映えて輝くかがや

八重桜枝もたわゝに花房の重たげに咲く花の可愛ゆらし

武者人形幟に囲まれ生々と初陣待ちし意気盛なり

流れゆく川面にゆれる花筏散りゆく花の名残り惜しみて

紫の花房長き藤の花蜜貯えて蜂にあたえむ

穀 雨

豊橋 胃 甲 節 子

新緑を優しく濡らし降る雨は穀雨と誠良き名と思ふ

お裾分けの初物の浅蜷元気良く潮吹く夜半を静かに見守る

ヤブ椿の一枝撓ふ程の花重たく見ゆる細き枝にて

電動ベッドに車椅子迄留守の間に用意したまふ妹の嫁さん

バイクにて日毎見舞ひし父母の事妹の優しさ嫁ふたり見習ふ

きつちりとけじめをつけし吾が友の強さよこれより平安であれ

初物の早蕨戴き灰汁抜きて柔らかきみどりの色を楽しむ

スカイツリーも富士も眺めつ只管に研修に励みつ母の夢見む

吾が桜なべて散りたりテレビにて京大阪の桜に見入る

優しかった楽しかったネあの時代炊飯器さへ無かりし時代

手作り弁当

春日井 清澤 範子

久し振りに夫と神社へ詣で来ぬ木々間伐され明るくなりぬ

境内のあべまき楠の木倒されてここにも自然が失なはれ行く

花見にはノンアルコールのミニ缶に喉をうるほす手作り弁当

公園の花吹雪の中に吾居りて子等のサッカーの動き見てゐる

吾歩く道辺に諸草繁る中赤き虎杖太く生えをり

自転車を押して神社に詣でれば小鳥の声に迎へられつつ

堤防の桜散り果て夢の赤昨夜の雨に風受け落ちて

堤防の細き流れの半分は桜吹雪にうもれゐるかな

ヘルニアの娘と歩くりハビリにまわりの桜五分咲きの道

公園の芝浅緑に広がりて黄色のたんぽぽ丈短かに咲く

内 緒

東京 富岡 和子

五万人陛下傘寿の御祝は乾門^{いぬいもん}まで桜道行く

坂下門老若男女埋めつくし枝垂のべにと桂の芽吹き

敷きつめる花びら脇のタンポポは百パーセントのいのち咲かせる

紫陽花のやわき葉のなか蕾あり内緒のように又開き見る

菊さし芽土の入れ替え押せ押せしちからの尽きて日向ぼこ

桜花^{はな}見まで楽しみたりシクラメン「雪ふったね」と小さく拍手

花水木ご成婚樹の白と赤児^こ童^ら等を見守るごとき枝振り

ここち良し卯の花月の十五夜は部分月食いそぎて辻へ

雑司ヶ谷面影橋と家並とホームに甘味^み処^せあり都電の旅を

髪痛みパーマ中止にさみしくて穀雨の恵み我が身に乞うた

花道に

東京 森岡陽子

寢室に差し込む月の明かり先一塊の犬の寝姿

春一番河津桜の花見客埃埃でシートも敷けぬ

墓参り並ぶ地藏の足元に沿って咲きけり黄水仙の花

被災地の人々歌う万感の三十一字の思い悲しく

三年間悲しみ胸に歌をよむ心隠すも被災地の人

使えぬもそれでも握る家の鍵被災地からの思い出の歌

親と子が別れし場所はあの時の津波悔しと短歌に込めし

花道に拍手喝采大向う六方踏みて播磨屋見せ場

楚々とした着物姿の姪と共祝い歌舞伎の鳳凰祭に

大雨に突風雹と荒れし時桜吹雪の舞ひも乱るる

三井寺

東京 小柳千美子

運慶の作と伝わる仁王像邪心を碎く慈悲のまなざし

吾が打てる鐘の霞みし三井寺に願いし事の只ひとつあり

金堂にかそけく流る楽の音や求め帰りて心癒さむ

天皇の産湯と伝う闕伽井屋に甚五郎作竜の気迫よ

弁慶の引摺り鐘に不思議あり古からの語り種なり

丘の上に孔雀放てる処あり明王の風かぐわしきかな

突として声明起る境内に散華となりて花の散るらむ

身の内に仏性ありと説きし法あらそう心如何に治めむ

築地堀見えし辺りの石橋は智証大師の徳を伝うる

朝夕の琵琶湖にひびく鐘の音や母となりたる龍の伝説

歌劇

豊橋 伊与田広子

久しぶりドミンゴテレビに出てきたり歌劇のアリア歌ひこなしぬ

ドミンゴは訪日せし時名古屋にて大ホールで歌ふを二回聞きし

名古屋にて黒髪ひげなし今にては白髪白ひげ長くして

ドミンゴは外套着たりて歌ひをり中頃にマフラー巻いて歌ふ

老いたりて咽を守るは大事なりドミンゴの声若き頃と変らじ

水分を採らねば脑梗塞にわれは思ひて十分に採る

暖かくなり出したりてわれの膝次第に痛みやわらぎゆきぬ

近づけむ猫の鳴き真似したりしにわれを見ながら遠ざかりゆく

柿の木は芽吹きをりたり雨降らずわれはホースで水をまきたり

今朝からは雨の降りをりほつとせり庭の木々など潤ひにけり

ばいも百合

新城 半田うめ子

職を退き生れ古里に帰り来て一人の生活猫と楽しむ

数ひきの猫の居たりて前畑に柿の木のぼりて楽しむ猫も

貰ひしは重雄先生ばいも百合ゆり合同花会に楽しみたりき

白き花庭中に咲くばいも百合やさしかりしよ重雄先生

夜道行く西川の辺にていたち見ゆ本宮の森より出でて来たれり

今日も又心やさしく孫の香奈造りし飯をもちてくるなり

弁当をもちて行けぬににぎり飯下さいました杉浦先生は

小学校杉浦先生やさしきの最高の点数吾の教育手帳

松原の友より貰ひしブルベリー―食みてより目のよくなりたり

午の弥生月

名古屋 近藤 映子

病院の「帰宅申請届」を頼みたり夫の四十九日のお寺様との打合せ

我部屋は六人入りの廊下側車椅子トイレ出入りは易し

日曜日娘は車検町内総会とやはり夕方遅く顔出す

わが夫は吾の入院知らずして夫の四十九日は是非とも参らねば

病院の夕食のちの長かりきテレビカードのさっさと減り行く

安静の二週間にて車椅子歩行機無くては歩けぬ我身よ

娘より夫の四十九日法要の打合せ長男と共にお寺参りを

窓の外春の日差しは見えれども外は寒いと看護師さんは言う

二十一時消灯時刻の来たれども吾スタンドを付け原稿書を

全粥の二百十gと牛乳と卵焼一切付サラダの朝食を

念願

蒲郡 杉浦恵美子

残雪の焼山温泉訪ねたり夫がかさねて来たがりし宿

露天湯の眼前斜面の奥の奥夫遊びたる焼山あるらし

何と無く夫が身近に居る感じ夕餉に冷酒一口含めば

四年経て念願ひとつ叶へたり夫の代りに焼山温泉

淋しさは相も変はらず消えねども夫を想ふる旅を続けむ

糸魚川夫が山など愛さずば我には無縁の土地にてあらむ

家持が崇めただろう立山の嶺の残雪春未だ遠し

家持が歌に遺せる立山は我が夫幾たび遊びし嶺々

犬山の逢魔が時の抜け小路祭の賑はひ遠くに聞こゆ

花冷えの広場に山鉾来るを待つひとりの宵山淋し過ぎます

誕生仏

豊川 平松 裕子

いつしかに母に慣ひて我もまた出掛くる前に玄関を掃く

立つ鳥は後を濁さぬなどと言ひ母は玄関を掃きてゐたりき

我が庭に初めてシヤクナゲの花咲きぬただ二花にしばし寄り添ふ

無住寺の寺役なりし我なれば誕生仏飾る今日花祭

天を指す誕生仏の小さきを小さき盥の中に据へたり

甘茶など求め得ずしてサクラとふ紅茶を盥の中に注げり

コンクリートの流しの脇のビン詰めのは智慧尼の詰めし日のまま

本堂の白きカーテン裂けしままに繕ふ人の無き正覚寺

本堂に掲げられたる牛車曳く智慧尼と学童の写真古りたり

ふくらめる蕾の先に淡き紅きざせる鉄線明日は開くか

朝明け

豊川 小野可南子

畑隅に赤なよなよと藪枯しその根を深く掘りさぐりゐつ

東海道五十三次御油の宿軒每つばめのお宿なるべし

はしりゆく我が軽四を掠めつつつばめの往来賑ぎはふこの道

射しはじめ朝の光は葉の先の止まる白玉きらり一瞬たまゆら

朝明けに未だ間のあるこの闇に石楠花の花の白々うかぶ

石楠花の花を大きく揺らす一羽朝すがやかに明けてゆくゆく

快よき方にむかはれるますか軒端の春の草々揃ひ咲きます

皓皓と満月明るきこの空に赤く小さくたしかに火星

メールこそ忙しきあなたに良からむと鷺草の芽が出揃ひました

朝ごとに墓のめぐりの珊瑚樹の葉替えの厚葉掃き浄めりつ

竹林

豊川 山口千恵子

昨夜吹きし風に散りたり白木蓮花びら白しろ散り広がりて

一花も残らず散りし白木蓮白き花びら遠く散り敷く

春の日に空缶の水におぼれ死す冬を越したる小さきカナヘビ

道畔の枯草の中にぼつぽつと赤く目立つはイタドリの芽

わが組がに空家となれる家二軒春蘭たけはなの雨降りしきる

沢水の音を聞きつつ登りゆく竹の子出づる竹藪目ざす

沢の水清々流るる傍に豊かに住める君の家あり

足先に触る尖りは竹の子か竹林の奥へふみ込みてゆく

息をつめねらい定めて唐鍬を筒めがけて打ち下ろす

具合よく掘れたる筍香りつつ瑞瑞白き切口の見ゆ

鎌倉一見の記を辿りて 豊川 夏目勝弘

麦畑にて高殿問ひしは子規なりき我にすぐそこと指さす駅員

外人のコンニチワに声かへし円覚寺古刹の古門くぐる

山間の狭き街並狭き道人人人の流れにのまるる

園児から高期高齢者らの遅き流れ少し苛立ち従ひゆくのみ

園児等を統べる保母さんの甲高き声の飛び交ふ建長寺古刹

彼処にも人の多きに鶯の声など望めぬ鎌倉の道

鶯の声によるこびし子規のことと思ひ描きて人混みのなか

拝観料払ひて境内に五分ほど一見するしかしかたなき所

寺院などは一見しそのあとは由比の隠士と俳談の子規思ふ

鎌倉の寺院名所は一見のみ子規と同じく我も一見

祝日

横浜 阿部 淑子

バスのみが日の丸かかげ祝日を祝いて走る時の流れよ
アスファルトにおおわれし土地多き中蟻の姿も時期遅くして
桜花散りて淋しくさせもせで芽吹きの緑鮮やかに映ゆ
母上にたむけ送らるのぼたん花小さき蕾も精出して咲く
連休にリュック背負いて親子連れ車中の会話微笑ましくして

風祭り

豊川 白井 信昭

小坂井に春を呼ぶという風祭り今宵大輪花火次々揚がる
歴史ある御堂山のこの三角点夕日に惹かれ山桜仰ぐ
西京塚の道を外れて備後塚趾見渡しながらひとり悲しむ
御堂山遊歩道にてしばし聞く春告げ鳥の今年初鳴き

「LP盤」

「招待」 秋山逸穂

梅園に月こうこうと射すなかを香りのひだがせまりくるなり
八重桜の花びら散らす雨がふり待ちあわせの時すぎてゆくなり
こぶし咲く枝を見上げる視界には描ききれぬほどの星がかがやく
たましいをゆさぶる歌声なつかしくLP盤に針おとすなり
職人がこてをふりふりぬる壁のまぶしいほどの白きかがやき

『俳句』

折り紙のちらばってをり花の雨

植村公女

三月やポケットに入る文庫本

抜け道の明るくなりしいたちぐさ

『いじやよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

カンボジアの入り日は赤く燃ゆるごとシエムリアップの台地に入りつつ

夫の呼ぶ声に私も庭に出づ春寒き今朝の黄水仙の花

鈴木美耶子

雛まつり女の子の誕生記念にと我が庭に植ゑむこの花海棠を

潮香る宿の昼御膳囲みたり幼をまじへ八人のわれら

吉見幸子

大震災三年の過ぎし十一日われもこの日にわが墓へ詣り

お互ひの無事の確認できるかもとわが家に集ふ日三月十一日に

牧原正枝

新しき生活迎へる孫二人にたゞ学生らしくとしづかにねがふ

鉢植ゑのミニバラ一つひっそりと咲き出だしたり濃き赤色に

岩瀬信子

雨音が少し大きくなりし夜受験に向かふ孫思ひをり

合格の報しらせに達磨の目を入れる黒目大きくはみだしながら

石田文子

五井山と職員室を詠む君よ我も愛しくかの日々思ふ

卒業式なれど退職せし今の吾寒さもピアノも案ずることなく

森 厚子

家変りて「なにかへんな」と書きくれし幼の手紙幾たびも読む

鳶高く風に向かひて舞ひ上がりつと舞ひ下りぬ遊びてゐるのか

山 崎 俊 子

桜餅のうすべに色に思ふかな餅屋の娘と子規の初恋

水蓮の白き花びらのひとひらをいつまでも見てゐる私の夕べ

三 田 美 奈 子

かき抱く孫の高熱に驚きぬ我に滲みまほし診察待つ間も

語らふを煩はしきと言ふ夫に我もいつまでも拗ねて黙しをり

水 野 絹 子

春日山さんの頂きにわが桜もあり蕾ほころび祭りの近し

わが土手に白水仙の咲き出だす手折りて供へむ彼岸のこの朝

牧 原 規 恵

夕暮れて家路に急ぐ道の辺へに水仙の香の幽か匂ひくる

プランターに色とりどりのパンジーを植ゑたれば早も春色にして

稻 吉 友 江

『かさね』の一句 五月号

立春を雨や雪やはやしをり

菜の花の色まだ浅くとの曇る

残雪の汚れて狭き塩の道

些事ひとつ思ひ出したる梅見かな

仲見世の造花飾りに春きざす

日のひかりもう一息か春浅し

約束も予定も無くて春炬燵

早春の雨のしづくやこけらぶき

背を丸め茶室に入る沈丁花

レガッタや光一条雲間より

大川の流れ温しか浮寝鳥

佐藤喜仙

松本周二

古川千鶴

山元正規

川井素山

田島昭久

小池清司

米田文彦

岡野安雅

長久保郁子

山本草風

左右確かめながら雛飾る

青木英林

散りてなほ苔庭飾る落椿

田中清秀

救急車去りし静寂や春時雨

池内とほる

寄せ植ゑの真中に揺れて黄水仙

小柳千美子

冬枯れて姿現る古墳かな

和田勝信

この雪は太宰治のつぶ雪ぞ

柳田皓一

腐葉土の盛りたる端から春芽見え

森岡陽子

紅の梅の香へペダル踏む

丸山酔宵子

春の雪投票所へと靴の跡

橋本修平

春耕の鋤ふり二日腰痛む

後藤克彦

早春の小径に遊ぶ子犬かな

吉田博行

雪あれど村は明るき寒の明

長島青山

私の一首

境内はピースピースの鳥の声聞きある私の心も平和^{ピース}

清澤 範子

夫と私の朝の始まり、神社へ詣でる今日も声高く小鳥の声を聞く、境内には私の両手で三ツもある楠の木の梢は、空高く天に向つてゐる、小鳥が多く止まりピースピースと私には聞こえる。詣でる度に辛い思い、又うれしい想いに平和を感じる。今日も一日最善を尽してピースピースで暮れました。

野火見えて煙乗り来る路線バス終点まではあと一時間

小柳 千美子

空港に降り立てば、南国の光と陽気な風。くねった山道を、バスはのんびりと走って行く。乗客は四人。やがて前方が白く煙り、こげ臭い風が車内に紛れ込む。遠い日の記憶がよみがえり思わず深く、息を吸い込む。ふるさとの匂い。はやる心で山々を、川を、畑を、田んぼを、空を、私は眺める。いくたび帰省を重ねても、いつも変わらない。

一時間後には、私は娘となつて父母の前に微笑んでいる。

春の海浮子は静かに上下する見つむる私の目は借られゆく

佐藤 喜仙

平成二十五年五月号より

子供の時に川釣りで釣りのおもしろさを覚え、大人になっても趣味としてずっと続けている。船に弱いので私の釣りは川釣りあるいは海の場合は堤防や岩場からの釣りである。

掲首は福岡の郊外の岩場からの釣りでメバルやメジナ狙いであるが、この日は潮が悪かったのか浮子はピクリともしない。それでもじつと浮子を見続けるのが釣師である。浮子は春の海の穏やかな波にのってゆつくりと上下する。それを凝視していると瞼が落ちてゆく。

あとわずか五月の晴れ日汗ばみぬ夫の転院明日に控えて

近藤 映子

五月末に又夫の転院が決まり、明日にせまり、落ちつかぬ私の心情であるが夫の余命が短くなる私の心配が私にせまって落ち付かぬ思いである。今の医療制度は夫の余命を短くする苦しい制度である。夫は何か日常と異なる転院の空気が緊張きみなる。十二回目である。物言えぬ、つらさが私には何故か分ってしまう。これが、私には毎回やり切れない。改善出来ないか。医療制度は病人の為に存在しなければならぬと夫が倒れて八年余りをずっと感じて来た。

ある自然科学者の手記 (25) 大橋望彦

『荒唐無稽』

どうしても納得がゆかない事が多い。何故そんなことが起こるのだろうか。不思議でならない。最近の日本の国民の皆が感じていることだろう。原発の問題である。原子をエネルギー源として発電に用いるようになることは、人が生物界で、抜きん出た力を得たこと、即ち、火を使うことが出来たことが発端となっている。それは火を自由にコントロールすることが出来るようになったからに他ならない。それでも火の怖さは今でも変わりなく、自然に発火する山火事は、大変な勢いを持っている。また、火山の噴火は予期する以上の猛威を振るうことがあり、コントロールすることは難しい。しかし、燃料となる石油、油脂類を始めとし、気体、液体、固体のいろいろな種類の火の元となる物質をそれぞれ全くコントロールして便利に使うことを習得してきた。今では、火を使うことはそれほど危険を感じないで使うことが出来るので、便利になったと言えるのである。是は、もし事故等で火事が生じてしまっても、その火を消すのに消防隊が駆けつけてくれるし、火を消す方法を色々知識として知っていることも役立つている。それであるから、何故そのように恐ろしい火をコントロールして使っているかと言うと、安全性に

自信があり、滅多なことでは火事になる心配がないほど、完全に気を配った器具が一般家庭ですら使われるようになっていくからである。是が本当の意味でコントロールしていると言うことである。こんな判りきったことをいう必要もないのに、今更、何でそんなことを言うのかと言うと、原発の問題は、こんな基本的なことが余りにも置き去りにされているからである。冒頭に述べた、納得ゆかないこととは、このことで、火を使う時の危険性以上に色々と制約があり、コントロールをすることが極めて難しい原子力を使用する場合、その知識を始め、技術も十分に整った上で始動させねばならないのが、原則である。

東日本大地震の発生以来、電力会社はその原子力を用いている当事者として、災害に対してどのように対処してきたかは、どうみても、おかしい。原子力のコントロールに破綻をきたしているのである。というか、原子力の危険性、怖さを十分に理解していないのではなからうかと、疑いたくなる。そもそも予期しなかった震災、津浪と言う天災を理由にする根拠は無い。どのような理由にしろ、事故があつた場合の十分な対処の仕方は変わり無い筈である。少なくとも、災害を拡大させるようなことの無い手段を可及的に講じなければならぬ。放射性物質の放出・流出が食い留められなければ、是が出来ているとは言えない。しかし、国の元首が、国際的な会合の席で、現在、事故のあつた原子力発電所は、ある一定範囲内に放射性物質は完全に制御されているので全く心

配することは無いと明言した。その直後に現地に赴き、電力会社の社長から同じことを言わせて、自分の言ったことには間違いがない。そのように報告を受けていると責任転嫁のようなことをしている。政治の世界と、科学の世界とは、こんなにも異なるものかと言うことを目の当たりに見たような気がした。実際には、制御する手段が覚束ない状態としか言えない。

科学には『荒唐無稽』と言う言葉は無い。理論があり、未知の世界でも総力を費やしてでも解決に当たることが、宿命的に約束されているからであり、もし万が一にでも、危険を伴う事故の場合、他の学者、研究者の力を借りても対処する義務を自然と感ずるのが普通である。『荒唐無稽』とは、莊子が齊物論で使った孟浪の言、から転じて、荒唐の言に由来し、取り留めの無い、即ち、根拠も無いと言う意味と、稽は、考えることの意味で、滑稽こけげ（おかしいこと）、稽古（昔のことを考えることから、学問を習うこと）等に使われている。それが無いのであるから、出鱈目で、馬鹿げていると言う意味に使われている。従って、『荒唐無稽』は、何の根拠も無く出鱈目のことを意味する。もしかして、今の電力会社がやっていることは『荒唐無稽』なのか。そうだとすると、日本の原子力政策は、極めて滅亡的と言わざるを得ない。いまや、地震・津浪のみが災害ではない、人災を加えないと成らない。それでも、原発問題は、一方で活断層が問題視されている。それも、活断層がOKであるならば、即、再稼動し

てもよいような風潮にあるが、是とても問題をすり替えてはいないのか。問題なのは、今の原発の状態は絶対に自信を持って稼動することの出来る状態なのか。と言う問いに答えを出して欲しいと言うことなので、人災を含め、自然現象全てに対して、予測出来ない危険因子によって災害が生じたとしても、生じた災害に対処出来る方策が確立しました、と言うまで再稼動は認めませんと、何故、宣言出来ないのか。石油コンビナート等で、想わぬ事故で危険な状態になって、お手上げの状態となったと言う話は未だに聞いたことはない。是は、危険管理が十分なされているからで、たとえ爆発事故等が起こっても、それに対処することが出来るシステムがある。原子力に対しては、この肝心なシステムが完備されていないことが露見した。せめて、再稼動する前に、原子力政策では、この防災システムが完備されたことを国民に納得させて欲しい。今のような未完成の状態である内容の論文を書いて、科学誌に投稿したとすれば、即、返却されてしまうであろう。そのことを考えてみても、政治は科学をなかがしろにしないで行なってもらいたい。それにしても、今、下北半島に新しい原子力施設を作る計画があり、それに対して、現在問題を抱えている電力会社が、その一部投資に加わろうとしている。このセンスはなんなのであろうか。問題意識の薄さにただ呆れるばかりである。

絹の話 (43)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹と海彦山彦

日本の神話に世界に、海彦が使っている釣り針を山彦が借りて釣りに出たのだが、釣り針を失ってしまう話はずもが知っている話です。その針は獸骨製か、金属製かはつきりしません。獸骨製であればまた作る事も出来るでしょうが、海彦の嘆きようからして、当時としては二度と手に入らない金属製かも知れません。そうであればこの物語の時代背景は弥生末期〜古墳時代と想像されます。この頃絹の技術が日本に到来して来ています。山彦の失くしたのは針だけだったのでしようか、糸も失くした可能性がありますが、この糸も二度と入手出来ないテグス糸（糸を吐く直前の熟蚕の野蚕から作る）であったと想像出来ないでしょうか。当時釣りをする事は極めて進歩的な事で、魚は木や竹で魚を突き刺していた様です（アイヌの釣り風景など見た事ありません。私が南太平洋のニューフェブリデス諸島に旅した時も石器時代の生活の人達の漁労は木の棒で魚を突き刺す事でした）

稲作や養蚕など色々な物が伝わって来た中の一つにテ

グスがあつたのではないのでしょうか。作る方法は伝わらなかつたが、現物と使い方が伝わつたと思われます。海彦にとつてはこの針と糸は宝物同然であつたと同時に誰よりも魚がよく釣れたと思われます。

山彦はなぜ針と糸を失つたのでしょうか？釣りに慣れない為、かかつた魚をサツト釣り上げず、魚が右往左往して、糸が岩にこすれて切れてしまつたのではないのでしょうか。テグスは釣り上げる引つ張る力は強靱ですが、摩擦には弱く、切れ易いのです。私共が子供も頃、やはり釣り糸は岩に擦れると切れてしまいました。神話もこんな風に思い巡らすのも良いかと思ひます。

「テグス（テングス）」

テグスと云う言葉は釣りの好きな人なら誰でも知っています。三河地方等ではテングスと言つていました。しかしそれが何からどの様にして作られた物か意外に知る人は少ない様です。

テグスが日本にもたらされたのは、遣唐使が持ち帰つたのが最初と言われておりますが、養蚕技術が伝わると同じくらしい時代に現物が移入されたと仮定すれば、海彦山彦の話に整合性が有ります。ところが日本で製造さ

れ始めるのが、一般庶民も釣りをする様になる江戸時代中期の頃からです。それ迄はテグスの作り方は誰も知らず、色々な憶測で書かれた物が多く有ります。長い間中国の広東方面から輸入され、長崎から大阪に運ばれ全国津々浦々に売られていった様です。

テグスは樟(くす)の木の葉を食べて育つ樟蚕(ヤママユガ科の絹糸昆虫：白髪太郎)が繭を作る直前の虫の胴を二つに切り裂き2本の絹糸線を取り出し酢酸(食酢)に漬け、透明になった所で取り出して長く引き延ばし糸を作ります。この様な風景は樟のきの多い南西日本ではナイロン糸が普及する迄あちこちで見られました。

二千年近く釣りの世界をリードして来たテグスも摩擦と劣化に強いナイロン糸にはかなわず、今日ではすっかりその座を明け渡してしまいました。しかしナイロン糸はあちこちに放置された物が、鳥などの足に絡み付き環境破壊の大きな問題になっています。

【偽テグス】

江戸時代はテグスで財を為す者が有り、長崎や大阪には何十軒もテグス問屋があった様です。絹糸昆虫の虫であればいずれも一見同じ物ができますので、天蚕や家

蚕などで作られた偽テグスも売られていた様です。しかし強靱さは樟蚕に勝る者は無いと言われていました。

絹は虫の種類によって光の反射角度や乱反射の程度が微妙に違います。樟蚕の糸は天蚕の様に強い乱反射をしなく、糸に含まれるタンニンが作用して、水中で水に馴染んで魚に警戒心を起こさせなく、むしろ好ましい物に見えるのでしょうか。現在でも釣り針のハリスの所にテグスを巻いたものが有るそうです。

【樟蚕】

樟(楠)の葉を食べるので樟蚕と呼ばれていますが、この虫はかなり食性が広く、ブナ科、バラ科、ウルシ科、ニレ科、クスノキ科、カエデ科、など食い荒らし、白い毛に覆われた毛虫で、一般には見つけしだい駆除される事多いです。繭は網の目の様に透けて中の蛹が見えますのでスカシ俵などとも言われています。

江戸時代にはこれを糸いでラシャや棉の様な生地が織られていた様ですが、今日では特殊な好都家が織るくらいでしょう。

戸外には繭を作る昆虫が沢山棲息しておりますので、里山ハイキングのついでに観察しながら楽しんで下さい。

物理学者と詩歌の世界 (53)

一石

フランシス・クリック

フランシス・クリック (Francis Crick、1916 - 2004) は、英国の物理学者、分子生物学者。ワトソン・クリックのDNAモデルで知られている。

クリックは、ロンドンのミル・ヒル高校を経てロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジで物理学を学ぶ。ケンブリッジ大学キーズ校で物理学の博士号を取得。第二次大戦中、クリックは英国海軍機雷研究所で機雷の研究・設計に携わった。戦争終結後、1947年クリックは生物学を学び始めるが、物理学者の訓練を受けた生物学者として、次第に生物学の世界で頭角を現していくことになる(参考資料1)。生物学に転向したクリックは、たった6年足らずで世界的な論文の執筆者となる。1953年に、科学雑誌『Nature』にわずか2ページの論文(『デオキシリボ核酸の分子構造』)をジェームズ・ワトソン(注1)と共著で発表する。DNAの二重らせん構造を示したこの論文は、その後の生物学を大きく飛躍させる科学史上の記念碑的論文となる。古くから知られていた遺伝という現象を、具体的な物質的基盤をもった科学的現象である、と決定づけたのである。この功績

(「核酸の分子構造および生体における情報伝達に対するその意義の発見」)により、1962年、クリックはワトソン、モリス・ウィルキンス(注2)とともにノーベル生理学・医学賞を受賞した(注3)。

その後、米ソーク研究所で研究生活を送る。1990年頃からクリストフ・コッホとの共同研究をはじめ、なぜ脳から意識が生じるか、という問題に取り組み始める。クリックは意識を脳内の生理学的な過程に置き換える還元主義の立場から研究を進め、1994年に『驚くべき仮説』を発表して、脳を単純な神経細胞が複雑な組合せとしてみなせると論じた。ノーベル賞以外にもアルバー・ラスカー基礎医学研究賞(1960)、ガードナー国際賞(1962)を受賞している。

邦訳された著書に『DNAに魂はあるか―驚異の仮説』(参考資料2)と『生命―この宇宙なるもの』(参考資料3)がある。

注1: ジェームズ・ワトソン (James Watson、1928 -) は米国出身の分子生物学者。シカゴ大学卒業後、米インディアナ大学大学院で生物学を専攻。ケンブリッジ大学のキャベンディッシュで研究していたクリックとの共同研究により、「ワトソン・クリックモデル」を提唱。1968年から1993年にかけてニューヨークのコールド・スプリン

グ・ハーバー研究所の所長、1993年から2007年までは会長をつとめた。1989年から1992年には、国立衛生研究所（NIH）の国立ヒトゲノム研究センター初代所長もつとめ、90年から始まったヒトゲノム計画で、米国の中心的役割を担った。自らのゲノムを公開したことも話題を集めた。全米科学アカデミー及び英王立協会会員。大統領自由勲章、米国家科学賞を受ける（参考資料4）。

注2

モーリス・ウィルキンス（Maurice Wilkins、1916-2004）は英国の生物物理学者。ニュージールランドの生まれ。ケンブリッジのセントジョンズ大学で物理学を専攻し、1940年にバーミンガム大学で博士号を得る。第二次世界大戦中にはマンハッタン計画に参加。戦後、ロンドンのキングス・カレッジ・ロンドンで同僚のロザリンド・フランクリンらとともにX線回折によるDNAの構造研究を始めた。X線構造回折の分野で多くの業績を残した。87歳で死去するまで、キングス・カレッジ・ロンドンの生物物理学教授をつとめ、染色体のDNAの存在様式を研究していた（参考資料5）。

注3

DNAの構造解析写真を撮影し、DNAは「2、3あるいは4本の鎖からなるらせん構造」をなし

ていることを最初に予測していたのは実はウィルキンスの共同研究者のロザリンド・フランクリンであった。クリックは彼女の発表前のレポートを、クリックの指導教官にあたるマックス・ペルーツから入手、ワトソンもフランクリンと確執のあったウィルキンスから知らされていたと言われる（参考資料6）。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia: Francis Crick
- 2) F・クリック『DNAに魂はあるか―驚異の仮説』（講談社）。「魂は何処にあるのか」「DNAと人の心（意識）はどうつながるか」といった根源的な問いを論じた。私達の子孫ばかりか、魂も、DNAが作り出しているのではないかという仮説を提唱。
- 3) F・クリック『生命―この宇宙なるもの』（新思素社）。新パンスペルミア説（宇宙胚子説）を唱えて生命の起源と本性を語る。
- 4) Wikipedia, the free encyclopedia: James Watson
- 5) Wikipedia, the free encyclopedia: Maurice Wilkins
- 6) ブレンダ・マドックス『ダークレディと呼ばれて二重らせん発見とロザリンド・フランクリンの真実』（化学同人）・アン・セイヤー『ロザリンド・フランクリンとDNA』（草思社）

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十六 安田良子 1

安田良子は中村憲吉の長女で、昭和十二年に結婚した最初の夫に同十四年に先立たれて再婚、安田姓になった。

御齡なほよの老いまさりつつひたすらに書きます君が御書かみ尊たうし 昭和十一年『布野の霧むら』

父の辺に女学生なりし吾に歌すすめ「俺が見てやる」と言ひ給ひけり 昭和二十八年

歌作れと茂吉先生勧めますに解れば良いと父の言ひにき 昭和四十六年

以下の歌の引用はすべて歌集『布野の霧むら』からである。三首の製作年は離れているが、ある一つのことにかかわっている。作者が歌集の「あとがき」に、

昭和六年四月、女学校三年のとき、偶々父と同行の車中で、その日の歌会の打合せのために岡山駅に出て居られた茂吉先生にお逢ひした。香爐園時代の幼い日から十年振りにお目にかかった私に、先生はいきなり「歌を作れ」とすすめられた。とまどひにはにかむ私をたすけて、父が「いや歌など作らなくてもいい、分

れば良しさ」ととりなしてくれても、先生は「親父ぢや拙い、俺がみてやるから作れ」と強くすすめられ、当惑して御返事も出来ないでゐる中に発車のベルがなつてお別れした。

と書いていることが右の二、三首目の解説になろう。

その後、茂吉は良子に、「○御歌是非御おくり願ふ。月に十首ぐらゐづつよろしく候……御歌只今拝受」（昭和十年二月付）と催促の手紙を書いている。一首目の「御書」はこの手紙であろう。この三日後、茂吉は良子の母シヅ子に、「良子御嬢様さんより歌到来なかなか旨し少しせば、三段組にして三四づつ、アララギに御のせしでは奈何」と手紙を書いてさらに励ましている。

慌しく昨夜発ち来り先生の栄ある今宵の会につらなる 昭和十五年

灯の下に輝く御顔あふぎつつ湧きくる思とどめ難し

も 手をとりて喜び申さむ亡き父を心に持ちて吾は来りぬ

題に「斎藤先生学士院賞受賞」とある。昭和十五年五月十四日、『柿本人麿』の業績に対して帝国学士院賞が授与された会のために良子は広島から「慌しく」上京してきたのである。父が生きていたらどんなにか喜んだこ

とだろうというのが三首目である。

地下足袋に棧俵さげます茂吉先生を父の歌碑たつ丘
に導く

昭和二十三年

息つぎで登り来ませる丘の上黄葉すぎて風の寒き夕
べを

限りなく芽吹く裏山に茂吉先生とのぼりてくだりし
一日を思ふ

昭和二十九年

一、二首目は、昭和二十三年十一月、石見湯抱温泉からの帰途に中村家に立ち寄ったときの作である。茂吉の持つ棧俵は外出したとき尻に敷くためのものである。三首目は前年に亡くなった茂吉を偲ぶ歌である。

良子には、茂吉の死を悼む歌が「関西アララギ」に発表した一連と「アララギ」に載せた一連とがある。この中から幾つかを挙げる。

衣きぬすぐ手に受取りし電報に胸ふたがりぬ先生の死

昭和二十八年「関西アララギ」

君が死を告ぐる電報もちあるき一人嘆きて夕べとなりぬ

夢といふ梧竹の大書掛かり居きぐみの鉢植縁に置かれて

亡き父の縁によりて先生の娘の如く慈しまれたり

吾がよろこびに吾がかなしみに幾度かはるばると布野に來り給ひぬ

雨寒く悲しみの日の暮れゆきて白雲はやき月夜となりぬ

「アララギ」

雨晴れの月照る夜空ふけゆくは何処ゆきますみ魂と思ふ

秋陽の中に蜻蛉群れとぶ丘の上に君に従ひて楽しかりにき

一、二首目は悲しい知らせを受けて狼狽した長い一日を詠む。三首目は茂吉が息を引き取った東京新宿区大町の家である。中林梧竹は、十五歳で上京した茂吉のために恩人佐原露応の頼みで書を書いてくれた書家である。歌の書がその時のものであるかどうかは分からない。ぐみの鉢植えは茂吉が大事にしていたもので、「胡頹子を愛する歌」を何首にも詠んでいるほどである。

四首目で良子が「先生の娘の如く慈しまれた」と感じるほどに茂吉が良子を大事にしたのは、初期アララギをとにもり上げながら若くして逝った盟友の遺児だからであった。五首目は、父の死、自分の結婚式などのために茂吉が布野まで来てくれたことをいう。

六、七首目は斎藤家での一日目が暮れたあとの感慨があますことなく表出されているというべきだろう。

楽しい時間 19

山本紀久雄

2014年4月30日

相棒・家内の検査入院、結果について内科医師から「すい臓以外の臓器は問題ありません」との説明。続いて外科医師からは、内臓絵図面を使った詳しい手術方法と、手術結果についても割合明るい感じの説明があり、一時退院となった。

相棒が帰ってくると、食卓は一段と華やかになる。元来、料理好きで、盛りだくさんな傾向があったが、退院の日は、戻る途中でスーパーに寄って食材を大量に買い込んだので、一段と腕を振るってくれた。

一週間経ち、いよいよ手術のために、外科病棟に再入院した。いよいよ明日は手術日ということで、朝8時前に病院に来るよう指示される。

翌日、8時前に娘と病室に入ると、相棒は「行つてきます」と元氣よく微笑みながら手術室に向かった。手術は大体5時間くらいかかるとのことなので、待合室で待機していると、1時間少し経った頃、突然、ポケベルが鳴る。

どうしたんだ。不安な気持ちで手術室前へ急ぐと、看護婦がこちらへと手術室の前部屋に連れていく。そこには外科医師二人と看護婦が手術姿で立っている。

「残念ですが……」という言葉。最後の方は聞き取れない。足が震え、すくみ、一瞬、絶望感に陥る。

ロビーで茫然と座っていると、医師が来て「今、個室に入りました。本人には結果を話してあります」という。個室に入ると相棒はベッドに上向きのまま、眼は開いているが、そこに涙がいつぱい。まだ全身麻酔がのこっているはずなのに「私の人生は充実していた!」「やりたいことをやってきた!」「お父さんが心配だ。何もできないのだから!」と振り絞るように叫ぶ。こちらはそれに何も答えられない。ただ、相棒の涙を拭くのみ。それから二日間、早朝から夜まで、肩を落とし、ずっとベッドの傍らに座り続けた。

三日目の朝も病室に行くと、相棒が「奥さんより旦那さんの方が心配だ」と医師が言っていましたよと言う。

これを聞き、ハッと目が覚める。この二日間、何をしていたのだ。自分の生き方指針を忘れていた。若き時、師匠の城野宏から脳力開発の指導を受け、時には師匠に代わって講演してきたのに、どうしたのだ。本来の自分に戻らないといけない。

こういう時の指針は何か。そうだ。条件だろう。目の前に起きた事実は「ひとつの条件なのだ」と考えることを忘れていたし、今は条件を変えていくことが仕事のはずだ。

そう思いなおすと、気持ちが急にシヤンとなり、姿勢がすつくとしてくる。

条件を変えるには何が必要なのか。それは「事実をつかむことだ」。事実をつかむためには医師に尋ねないといけない。手術室前部屋の話だけでは不十分だ。冷静にどういう状況なのか、それを確認すべきだ。

それから医師に三度面会し、詳しく説明を求めた上で、当方が把握した理解内容で正しいかを確認するために、逆に当方から病状を説明し、この内容で間違いなかないかという作業を行った。次に治療の方法である。医師は当然、世にいう抗癌治療を勧める。これには必然的に副作用と厳しい痛みも伴う。どうするか。しばらく考えさせてもらいたいと、手術傷の回復を待つて退院した。

退院当日、娘は地方中都市に日帰りで行ってくるという。娘の元上司、転職したが、この男性の出身地に仙人・神様みたいな人がいると、昔に聞いたことがあるから、その人物のところに行くという。地方中都市空港に娘が降り立つと、男性の母上が待っていて、車でその人物のところに来て行ってくれ、そこで病状を伝え、薬をいたたき、夕方、自宅に戻ってきた。さらに、息子は先輩の奥さんが癌で、長いこと治療してきて、今では普通の生活に戻ったという治療方法をお聞きし、そのサプリメントを持参してきた。加えて、相棒の元上司女性が、血相を変えて自宅に乗り込んできて「このサプリメントを大量に飲んで」と強引に迫ってくる。相棒は、今までいたって健康だったので、サプリメントは一切拒否していたのだが、この状況下では素直に聞くしかない。

感謝の涙とともに、薬とサプリメントを口にした。

ところで、今度の退院は傷があるので、自由には動けないし、体力が落ちている。したがって、退院当日の夕食は当方の担当である。何をつくるか。いーとびあの辻教室の落第生であるから、こういう時は困るが、そんなことを言ってい

られない。何がよいのか。相棒に聞いても明確な答えはない。冷蔵庫の野菜室を見ると、蕪がある。そうか、この蕪を使つて

煮物をつくらう。もう一品何か。そうだ、ジャガイモがあるから肉じゃがにしようと、二品をインターネット検索で、どにか作ったのが写真。

幸いに相棒も娘も息子も元上司女性も、美味しいと言って食べてくれた。お世辞かもしれないが、これで少し料理のコツがつかめたような気がする。

退院して二週間後、病院に行き、主治医の診察を受け、その際に腫瘍マーカー指数の検査を依頼し、翌日、その結果を受け取りに病院に行った。当方は駐車場が満車で、遅れて内科に入っていくと、相棒が診察室から出てきて、血液検査結果を渡してくれる。急いで、期待の腫瘍マーカー指数を見ると、何と、手術前の指数から三分の一に激減している。嬉しい。誰もいなければ、大声で「ヤッター」と叫んだらう。手術日以後、始めて「楽しい一瞬」

となった。だが、まだまだ予断は許さない。本当に「楽しい時間」を持つまでの道は遠い。



鎌倉一見の記を辿りて 夏目勝弘

雪のため庭の木々や枝々が折れるのを、整備するため宇都宮に行くことになり、その途中鎌倉に寄り、子規の鎌倉一見の記を辿ってみることにした。

子規は藤沢で一泊したが、小田原まで新幹線でゆき大船で横須賀線で鎌倉に向う。

子規の年譜によると、明治二十六年子規二十七歳（二月十五日、血痰ごく薄くなる）三月二十五日、鎌倉に保養中の羯南を訪ねる。小旅行に出発、新橋より乗車。

藤沢の宿で目覚めた子規は、裏藪に鳴く鶯を聞き。（鶯やおもて通りは馬の鈴）と残し一番の汽車にて鎌倉に向う。

子規は由比ヶ浜に保養中の羯南の所へ、久びさの対面に歌の話し俳句の話しに半日を費やした。

○陽炎や小松の中の古すゝき、と詠み、

子規はひとり縄手づたいに行き鶴が岡に着く、銀杏を撫で御前に一礼

○銀杏とはどちらが古き梅の花

現在の大銀杏は平成二十二年の強風で倒れ切り根の二メートル余りが移植されている。

今日の鶴ヶ岡八幡宮は人人で参道は真直に歩けない程で、特に外国人の観光客が多く案内人も黒人、しかも二十名余を引き連れて。

次に子規は建長寺で

○陽炎となるやへりゆく古柱、と詠む

今日の建長寺は園児の集団でなんとも賑ぎやかである。

子規の通った山門の基壇の周囲には、園児等のリュック、水筒が整然と並べられ山門を一周している。

思い思いにとび回る園児等を、次へと引率するために保母さんたちは大声で園児等を集めるも、なかなか集まらない、ようやく列を作り次へと連れていった。

拝観料を払い入ったものの人々ばかり、建造物は大小の差はあれ、皆同じ、子規の一見の記がわかるような気がし、五分余り出てきてしまった。

書き止めようと手帳を探すもない、コートを脱いだ所で落したらしい。鎌倉駅まで戻り駅員に尋ねるも無い。

拝観料を払わなければ中に入れ無い、しかたないが払い五分余りで出てきた。

子規のその夜は由比ヶ浜の浦浪を聞きつつ一夜を、そして曙の頃、隠士と其と三人で星月夜の井に出る。

○鎌倉は井あり梅あり星月夜、と詠む

長谷寺では、○歌にせん何山彼の山春の風と詠み、隠士の案内で高德院へ

○大佛のうつら／＼と春日かな

此の夜は隠士の家に宿る。一見の記には（浪音高し汐や満つらん）と頻りに口ずさみて上の句置き煩へる隠士の聲ほのかにて我が夢はいづくの山をかけ廻りし。翌日は雪の下に古跡を探る。薦にからまれ苔に蒸された五輪の塔一つの、なれのはてを見る。

○梅が香にむせてこぼるる涙かな、と詠み泣く／＼鎌倉を去りて再び帰る俗界の中に筆を採りて鎌倉一見の記とはなしぬ。と締めくくった。

鎌倉一見の記は明治二十六年四月五日の日本に掲載された。

子規のあとを辿ってみたが、人人人ばかりで疲れひとしお、大船より湘南新宿ラインの快速で宇都宮に向う。終点のためゆっくりと眠れた。

「氷魚」のことから (161) 岡本八千代

今日は穀雨の雨が降っている。……

見るものはけふもまた雨ひさしよりおつる雨だれ画かんとする。

いそを

の歌が雨だれが廂より落ちる絵の色紙の中に書かれている。水色の雨の中に白の雨の雫がぼつぼつと落ちて美しい絵だ。私の書屋にその色紙の額が掲げられている。

御津磯夫先生のこういう歌や絵を見てみると、やはり浮んでくるのは子規のことだ。

前回までで、子規の小説を一応読み終ったつもりであるが、彼の小説観はほんとうは如何なるものだったのか?と問いたい気持ち。

河東碧梧桐の「子規を語る」の「十一月の都創作前後」(89P)に、「子規は、明治二十四年の冬期休暇になって、常磐舎を去って、駒込の某家に間借りをした」と言っている。それは「寄宿舎のようなガヤガヤする処では、所期の大事業を果すことは出来なかつたからだ。」と。また、「子規は、いつも試験勉強とは別な、前途に光明を望んだ胸一杯な緊張味を持って、大事業の前に跪坐した。」とも言っている。

子規の大事業とは、一体何か?——「それは、「小説『月の都』に筆を染めることであつた」「『月の都』は子規が世の中の舞台へ乗り出そうとする処女作であつた。」とも言ふ。

そのように一時は来客を謝絶してまで、創作にいそしんでいた子規は、新居に「小説会」を開くような余裕もみせた。また「山会」といって小説を書く勉強会も子規が開いた。お弟子さんは、自分の俳句の勉強をしている人たちであつたりして。

明治25年2月頃のことだ、当時の小説家として有名になってきた幸田露伴に、子規は、自分の小説「月の都」を見せたところ、あまりとりたてて読んでもらえなかつたことを感じて、かなり落胆したらしい。

そうこうしているうちに、子規は「もう、小説は書かない」と言つて、俳句や短歌の方へと情熱を燃やしていったのかと思つたけれど、今の私は、本当は小説を書きたかつた子規と思えてならない。

それは、子規には、自分の体力の限界を感じていたからではなかつたのか。つきつめて、ひとり籠つて長時間を書き続けてゆく体力が従って来なかつたのではないかとも思う。

いずれにしても、当時は、小説など文章表現するものは言文一致体になつてゆく過度期の時。いや、歌にしても俳句にしても写真と心情との表現方法のむずかしい時であつたろう。

子規は、そういう時に、「写生」の説をいちやく唱へはじめた人だつた。写真の中に主観を、主観の中に写実をと、自分の趣向を感じ入れていったのではないか?今の私は、文学することと科学することの大切さを思う。

「歴代天皇御製歌」(二十五)

賈名海屋資料館

『光孝天皇』第五十八代・在位八八四年(五十五歳)―八八七年(五十八歳)

光孝天皇は、仁明天皇の第二皇子。陽成天皇の時の摂政。藤原基経は、陽成天皇を廃し、高齡の光孝天皇を皇位につけるなど、天皇を私的に利用した唯一の人物。

御室派大本山、仁和寺は光孝天皇により着工、次の宇多天皇の代に落成した。
在位わずか四年で崩御されたが、和歌復興の其をなされ、和琴、また相撲を奨励された。

君がため春の野に出て若菜つむ我が衣手に雪はふりつつ

古今集 仁和御集

小倉百人一首 江戸時代の百人一首

衣手いづも袖

京都市右京区嵯峨の「芹川」周辺、御幸をされ、鷹狩りをし、和歌を詠まれた。

山ざくら立ちのみかくす春霞いつしかはれて見るよしもがな

仁和御集

かくしつゝともかくにもながらへて君が八千代に逢ふよしもがな

古今集

ことのはスケッチ (426) 今泉 由利

『貫名海屋 私注』⑥

長い長い外国での生活でした。日本を知らないことを思い知り帰り来ると、沖繩から北海道まで、せっせと旅をした。自身の日本での居場所探し。京都にはことあるごとに出掛けていたのだった。

ある日、桃山丘陵の方向に行こうと、まず伏見稲荷大社を訪ね、その道なりを歩いていると、静かなたはずまい竜宮門。石峰寺とありました。登る感じをお邪魔し、どなたも居られなかつたまま、石峰寺の本堂背後、羅漢山へ登り着き、そこは、風化された静寂。静かに入り込み、自らを石像群のなかのひとつと化し、ずつと座つて居たのでした。(この日の出来事は、二〇〇五年一月号のことのはスケッチ(313)伊藤若冲と貫名海屋と、掲載)

江戸時代の画家、伊藤若冲の下絵により、石工が彫りあげた石仏群。安永より天明初年までの十年余をかけ、五百羅漢を、釈迦誕生より涅槃に至るまで：裏山一面の石像群のお姿です。それはそれは安心の場所でした。

帰りがけ、若冲居士のお墓、その脇の長く筆形に立つ、貫名海屋、若冲を讃えて揮毫の筆塚に出合ったのでした。

若冲居士と貫名海屋と同じ時を同じ京都で共有されたことを確かに知るのでした。

筆塚には、どんなことが書かれているのだろうか。いつかきつと読んでみたい。私なぞ出過ぎてはいけない。など思ひ続け：でも我慢出来なくなり。石峰寺様をお願いをいたしま

した。すぐ筆塚「拓本コピー」読み下し文「をお送り下さいました。

後の日々、眺め続けていました。そして私なりの解釈の無札を詫びつつ、私の子供達が理解出来る言葉に書かせていただきます。

『筆塚』

伊藤若冲碑、所在、京都市伏見区深草石峰寺

- ①若冲居士の作画の画風は、奇想と形容するのにふさわしい。
- ②生前に建てた墓碑に刻まれた碑文を読むにつけ、人となりを感じ描けます。
- ③若冲居士の心の使い方は、普通とは異なることを知るので。
- ④石峰寺の裏山にある五百羅漢の石像に、終生にわたる若冲居士の心を感じます。
- ⑤若冲居士は、若い時より型どおりの画法を模倣することに不満をもちました。
- ⑥周到な厚い心をもつて水墨花鳥を制作しました。
- ⑦ある人は、若冲の絵画は、功を凝らしているけれど、墨だけで描いた水墨画の域を出ず彩色をすると上手に描くことが出来ないだろうと批評をしました。
- ⑧若冲居士は、このことを耳にし、特大の彩色画を数十幅制作し、その上に詩を記しました。
- ⑩現在、相国寺に収められているものです。
- ⑪自分自身を大切にし、むやみに人に従うことの無かつた人です。
- ⑫⑬作品が散逸することのないよう、相国寺に集めておく思ひがあつたのでよう。

①

奇哉若冲居士
之用心乎丹青
也余每晚遺然
想見其為人及

②

讀其壽藏碣知
其用嘉果異於
常人後上石峰
觀其所建五百

③

應真像始知用
其終身心力於
阿堵焉居士自
少專務新奇不

④

欲涉套習剋意
筆精作水墨翎
毛或評云若冲
畫雖工心於水

⑤

墨至設色不能
居士聞之乃作
大設色數十幅
又勅意賦彩人

⑥

所不為今身藏
相國寺者是也
蓋平生合作自
惜不妄與人

⑦

藏諸名山之意
云夫古之名匠
如顧陸吳李其
心靈其腕妙仙

⑧

爪所到竟描得
出佛經中諸變
相以肱發宇宙
之秘幻技到此

⑨

可謂盡矣後生
輩出皆腫若莫
敢企後塵倘有
鞭勸之士進步

⑩

又進道進不心
其勢必將忍及
於茲居士乃寄
諸澹漠無朕之

⑪

石像焉蓋其象
謂若就彼互相
有相之間千奇
萬變寶光百出

⑫

漏說恠誕如行
雲流水不可捉
定確有神仙點
化筆安得窮極

⑬

或然則有相之
不足盡無相而
無相乃足盡有
相也均獨寫焉

⑭

尔居士初置石
像肆頭有未倩
畫者輒使其出
一鋪資既而厭

⑮

塵土別與毛縛
菴石峰石像之
次一畫換斗米
終以身殉其用

⑯

吾可不謂奇哉
至其遺言表墓
傲筆形竟不能
忘於懷哀哉庚

⑰

當秋京輦地大
震多所頽摧應
真六不允歲發
已居士之絲清

⑱

房脩理復舊使
余識其由於墓
表居士有孫焉
貫名龜撰

⑲

我初終節沐苦至性超一物平
亦之約之頃為黃仲別暨陵境
鄉之不峰標有信際元不劍亦
為一勝境若伊若云冲庵居焉
因在碑文身名茲翁所畫可謂
能畫之筆雖画匠之畫噴覽餘

⑳

蘇寺所養碑拓僅存江世去止
既錫園之名勝得承承並覺拓
之凡尚也
昭味葵未初真 荷中敬尚識

編集室だより【二〇一四年 四月】

○広重の「名所江戸百景」王子大滝。石神井川兩岸の桜並木が花盛り、それはそれは美しい遊歩道はどこまでもどこまでも歩いてゆく。

○石神井川つぶち、日本酒の醸造を四季を通して行えるようにするため、ドイツのビール工場を参考にして設計された赤レンガ酒造工場があります。醸造試験所が公開されて、出来たての清酒の試飲をさせていただきました。やさしい味でした。

○日比谷画廊に於て、藤崎陽子さんのテキスタイルアート展。あこがれ、夢、の実現でした。

○セントラルミュージアム銀座。書人社選抜書道展、植村公子さんの、穏やかにも意志、素晴しい一幅に出会いました。

○右に傾くことに気付き、脳神経外科に診察を受け、CT、MRI、MRA：たちまちそんなことになった。放射線治療の勉強はしているので、自身で確かめることに興味はあった。最先端つて、けつこう大工仕事みたい。

○「瀬音」皇后陛下御歌集を読ませていただいています。皇后様は、短冊状の和紙に「天蚕の卵」をつけ、クヌギの枝に巻き、ホチキスで留め、7月上旬には緑色の繭と育つそうです。「秋蚕」と五首詠まれています。あまりの感動に掲載させていただきます。

○真夜こめて秋蚕は繭をつくるらしたただかすかなる音のきこゆる

○時折に糸吐かずをり薄き繭の中なる蚕疲れしならむ

○籠る蚕のなほも光に焦がるること終の糸かけぬたずまひあり
○音ややかにかすかになりて繭の中のしじまは深く闇にまさらむ
○夏の日に音たて桑を食みし蚕繭ごもり季節しづかに移る
○植村直己「夢の軌跡」を頂きました。泣きだしてしまいます。お貸しします。お申し出下さい。

○彫刻刀の研ぎ方を習った。いろいろな形の刀を自分で研げた。感動。

○自身に「脂肪」を燃やす力が不足しているという診断に、毎日、筋力体操と、ストレッチに通うことにした。心地よく熟ている。

○新井とく子さんの歌集「音羽の流れ」が美しく、心やさしく出来上りました。こんなうれしいことはありません。

『今朝もまたお墓参りにわれはゆく音羽の流れに沿へるこの道』

○葛西臨海公園駅に降りると、東京湾の水平線までの広がりが見渡せる。空と海と緑と草々と。吟行のお仲間と一緒に。水族園の別世界。巨大鮪が超速にゆき、同じ水に鯛の群。鮪のエサになっているのだろう。世界中の、見も知らない数々にも出会え、胸がいっぱい、鳥類園には、東アジアだけに生息するトキの仲間、クロツラヘラサギ。世界に三千羽ほどしかないそうだ。

○雪も嵐も去った奥多摩へゆく。犬を六匹飼う友に、吠えない、動かない、とりの唐揚ばかり食べている奥多摩の犬。ドネルの往診をお願いした。山のなだり一面、二輪草の白い花盛りでした。

○蒲郡俊成短歌大会、二〇一四俊成の里短歌大会詠草集をお送りいただきました。ありがとうございます。

和菓子街道 (92)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(15)

松阪で、日本最初の厄除観音で知られる岡寺山継松寺に詣でた折りに立ち寄った伊賀屋。文政2年(1819)から五代に渡って続く餅屋だ。

伊賀屋の名物はさわ餅。というより、伊賀屋の店頭に並ぶのは、さわ餅だけだ。折り紙のように四角に切ったのし餅に、餡を挟んだもので、白と蓬の2色がある。

さわ餅は、松阪～志摩磯部辺りまでに分布する郷土菓子で、「沢の水を使って餅をこねた」ことから「沢餅」だとか、「棹状に作ってか切るから棹餅」とか、磯部に鎮座する「伊雑宮の竹取神事で使う笹にちなむ笹餅」から転じたのだとか、名前の由来には諸説がある。

伊賀屋には後継者がおらず、人手不足でさわ餅しか作れないのだと店主の川北さんはいう。店の営業は7時半頃からだが、午前中には売り



切れてしまうことがほとんど。早い時には9時にはもう店仕舞いだという。早朝にお参りしたことで偶然出会えた、消えゆく郷土の味だった。

弾力のある餅で、しっかりと炊き詰めた粒餡が挟んである。

◆伊賀屋

住所：三重県松阪市本町2150

電話：0598-21-6040

お知らせ

▽七月号の原稿は、六月一日(日)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△春本番、遠く見る山々も盛り上るような緑、私の庭の草も木も緑、何となく朝が楽しく思えるこの頃です。

消費税の上ったことは十分承知してはいたのですが、四月二十日校正を終え、ゲラ刷りをレターパックに詰めポストへ投函、……夜になって郵便局員の方が雨に濡れながら、朝、私が投函したレターパックを抱えて「切手代十円を」と言ってきたら来ました。びっくりするやら、恥ずかしいやら、これが印刷所へ着くのが遅れて発送に支障を来すのでは?そんなこんなで心配をしたのですが、いつもの様に二十六日に滞りなく発送が出来ました。胸を撫で下した次第です。

反省することの多い私のこのごろです。

(小野)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年五月二十五日印刷 第六十一巻 第六号
平成二十六年六月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉 由利

三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇二六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

E-mail yuri88@cronos.oon.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創美